

野球好き、いや野球大好き～中学生のための交流会～

—SIGMA—

代表者 梅田晃大（理学B 1年）
構成員 江谷稟空（理学B 1年） 小林千加史（理学B 1年） 佐々木未来（理学B 1年）
中川真優（理学B 1年） 箱田真央（教育B 1年）
林彪斗（理学B 1年） 林宗明（理学B 1年）
迎山日那（教育B 1年）

1. プロジェクト概要

部活動の地域移行が令和8年から本格始動するにあたり、地域移行期間に部活動で活動するはずであった中学生やその保護者、教育現場の先生から、これから先の部活動について困惑した声があげられる。友人と練習してきたことの発表する場や他校との試合、地方大会や全国大会の実施等が行われるのかといった不安の中で活動する多感期の中学生のストレスは計り知れないものと考えられる。

私たち SIGMA は、部活動の中でも「野球」に焦点をあて、山口市における部活動の地域移行の現状を調査するとともに、野球が大好きな中学生や小学校6年生を対象とした交流会を開き、「安心して野球ができる環境が山口市にはある」といった意識を構築することを目標として活動した。

様々な地域の選手が交流を深め、技術力の向上だけでなく、仲間意識や協調性を高め、将来の野球界や地域活動・地域教育に貢献できる人材の育成、山口大学に進学し多方面に活躍する人材の育成をする場として位置付けた。

2. プロジェクトの背景・目的

このプロジェクトを始動させた背景には、代表の梅田が過去に経験した「野球を諦める」という決断が大きく関係している。

代表の実兄が野球をしていたこともあり、代表は小学校3年生から地域の少年野球チームで野球を始め、少年野球ではキャプテンを務め、中学校時代には県大会ベスト8などの成績を修めた。いつからか高校に進学後も野球を続けることが当たり前で、「甲子園に出場すること」が目標となっていた。

しかし、代表には「学校教員になる」という目標もあったため、将来のことを優先し、野球部のない高校に進学することとなった。この「野球を諦める」という決断は、代表の人生で初めての大きな決断であり、同級生が球場で活躍している姿を見ることは苦しいものだった。

これらの経験から、「“環境”のせいで野球を諦めてほしくない」と考えるようになった。その頃、全国で部活動の地域移行に関する情報が注目されるようになり、部活動の地域移行という環境でスポーツを諦める中学生がいてほしくないと思い、「野球好き、いや野球大好き～中学生のための交流会～」プロジェクトを立ち上げ、SIGMAとして活動をスタートさせた。

3. 活動方法

山口市教育委員会や部活動地域移行推進室、山口市内の中学校教諭からの情報をもとに、山口市内の中学生と小学校6年生を対象とした野球イベントや交流会を開催した。

対象とした中学生や小学校6年生が多く参加してくれる可能性の高い休日にイベントを実施し、平日にはミーティングを行い、イベントに向けた緻密なスケジュール調整を行った。

また、全日本軟式野球連盟学童部の大会で広報活動やアンケートを実施し、部活動地域移行に対する意見をSIGMAの活動に反映した。

4. 活動内容

「野球好き、いや野球大好き～中学生のための交流会～」プロジェクトで SIGMA が実施した活動は以下のとおりである。

4. 1 吉敷少年野球団 練習

8月31日（土）に山口市立良城小学校グラウンドに訪問し、吉敷少年野球団の練習に参加した。

吉敷少年野球団は代表・梅田が所属していた少年野球チームであり、伝統ある少年野球チームである。長年にわたり地域の子どもたちに野球を通じて、礼儀とマナーの大切さやスポーツの楽しさ、チームワークの大切さを伝えてきたチームであり、プロ野球選手も誕生した。

今回は、練習中にバッティング練習の指導やノックを打たせてもらい、“指導”をする貴重な経験をさせてもらった（図1）（図2）。子どもたちは一生懸命に練習に取り組んでおり、その真剣な眼差しから野球に対する熱意が強く感じられた。また、選手同士が声を掛け合い、励まし合う姿からは、チームワークの良さが伺えた。

指導の際には、バッティングフォームの基本やスイングのタイミング、守備位置での姿勢など、細かな点にも注目し、子どもたちが理解しやすいように丁寧に説明を行った。選手たちは積極的に質問をしてくれ、上達したいという意欲が伝わってきた。

練習中や練習後に、選手たちや指導者、保護者の方々とお話することができ、野球に対する思いや私たちが焦点をあてている「部活動の地域移行」について意見交換ができた。地域に根付いたチームならではの温かい雰囲気に触れ、非常に有意義な時間を過ごすことができた。



図1 バッティング練習中の様子



図2 ノック中の様子

4. 2 山口市立宮野中学校 練習

9月9日（月）に山口市スポーツの森 第2球場に訪問し、山口市立宮野中学校野球部の練習に参加した。

山口市立宮野中学校の野球部顧問は山口大学卒業生の教諭が務めており、快く練習への参加を許可していただいた（図3）。中学生の練習に参加するのは SIGMA として初めての経験であり、最初は緊張したものの、次第に雰囲気に馴染み、楽しみながら練習に取り組むことができた（図4）。

練習では、キャッチボールやシートノック、バッティング練習など、さまざまなメニューに参加した。中学生ならではの体力や技術レベルの高さに驚かされる場面も多く、大学生にとっても学ぶことが多い時間となった。また、選手たちが練習中に積極的にコミュニケーションを取り、互いにアドバイスし合う姿が印象的であった。

指導の中では、特に基礎の重要性を強調し、基本動作を繰り返し確認することの大切さを伝えた。選手たちの真剣な顔から、自らのプレーに取り入れようとする意欲が感じられ、非常に充実した指導の時間となった。

練習後には、顧問の教諭とこれからの野球界、部活動についてお話をし、教育現場の声を聞くことができた。



図3 ノック中の様子（ノッカー：教諭）



図4 ノック中の様子（連携プレー）

4. 3大内中野球クラブ エキシビジョンマッチ

10月27日（日）に山口高校グラウンドで、大内中野球クラブとエキシビジョンマッチを行った（図5）（図6）。

大内中野球クラブは部活動地域移行を既に取り組んでおり、山口市立大内中学校に通う生徒が野球部と併用して活動している。私たちが焦点をあてている部活動の地域移行に取り組んでいる団体と交流する機会をいただき、多くの学びを得た。

試合では、選手たちが日頃の練習の成果を発揮し、互いに競い合いながらも楽しんでプレーする姿が見られた。特に、試合中にお互いに声を掛け合い、ミスをしてもしなうなど、チームワークの良さが際立っていた。また、選手たちが全力でプレーする姿からは、野球に対する情熱が強く伝わってきた。

試合後には、両チームと一緒にノックを行い、大学生と中学生が野球というスポーツで時間を共有することができた。

試合の結果は、4対5で山口大学の負けに終わった。また機会があればリベンジをしたい。



図5 山口大学 SIGMA 集合写真



図6 山口大学 SIGMA 打撃

4. 4少年野球 交流イベント

11月24日（日）に山口大学野球場で少年野球交流イベントを開催した（図7）。

山口市内の野球少年がキャッチボール、ノック、エキシビジョンマッチ、ベースランニングに取り組んだ（図8）。特に印象的だったのは、普段敵チームとして対戦していても、皆が仲良くプレーをしていたことである。試合中や練習の合間にも笑顔が絶えず、互いに声を掛け合いながら楽しんでいる姿が見られた。

イベントを通じて、子どもたちが野球の技術だけでなく、チームワークや他者との交流の大切さを学んでいることを実感した。また、部活動の地域移行に際して、野球少年の活躍の場が減少することは絶対にあってはいけないと感じた。

今回の交流イベントは、野球というスポーツを通じた繋がりを再認識する貴重な機会となった。



図7 円陣の様子



図8 ノック開始前の様子

4. 5 徳地野球スポーツ少年団 野球教室・第2回野球教室

1月18日（土）と3月8日（土）に徳地野球スポーツ少年団と野球教室を開催した（図9）。

徳地野球スポーツ少年団は少人数ながらも、野球ができる環境に感謝することや道具を大切にすることなど、礼儀を大切にしながら活動している。

初回の野球教室では山口市立徳地中学校に訪問し、第2回野球教室では山口大学に来校してもらい開催した。両日とも SIGMA が考えた練習メニューで、基本的なキャッチボールやバッティング練習、守備練習など多彩なメニューを通じて技術の向上に取り組んだ（図10）。

子どもたちが一生懸命に話を聞き、実践しようとする姿が印象的であった。また、第2回の教室では山口大学の環境を体験してもらうことで、子どもたちにとって新鮮で刺激的な機会となった。

どちらの野球教室でも、子どもたちだけでなく、大学生指導者や保護者も楽しみながら練習に取り組んでいる様子が見られ、スポーツを通じた交流の重要性を再確認することができた。



図9 練習中の円陣



図10 練習中の様子

5. 感想



【代表】梅田 晃大

山口大学に入学して2か月経ったある日、部活動の地域移行のニュースが情報番組で取り上げられ、「全国で部活動がなくなる」ことは中学生にとってマイナス面しかないと思い、「クラブチームを設立して、安心して野球ができる環境を整えたい」と友人に話をしました。その時に「山口大学にはおもしろプロジェクトというものがあるって活動を支援してくれる」との情報を聞きました。その情報を教えてくれた人こそ、副代表の江谷稟空くんです。

その後すぐに、自主活動ルームへ行き、石井コーディネーターに想いを聞いていただきましたが、おもしろプロジェクト2024年の締め切りはとっくに過ぎていました。来年こそ申請してプロジェクトを始めようと考えつつも、すぐに行動できないことにすっきりしない心持ちでした。

それから1ヵ月後に、石井コーディネーターから「おもしろプロジェクト2024年二次募集をする」ことを教えていただき、二次募集採用団体として活動をスタートさせました。

私はこの一連の流れを運命だと感じています。たまたまニュースを見ていたら興味・関心のある内容のものに出会い、たまたま一緒にいた江谷くんからおもしろプロジェクトの存在を教えてもらい、たまたまおもしろプロジェクトが二次募集を開始した。それだけでなく、おもしろプロジェクトの掲示板には、私の恩師の先生が写っており、おもしろプロジェクトを経験していました。偶然とは思えないほどの偶然が重なり、活動することができました。

野球は7割失敗するチームスポーツです。その中でチームがどのように得点を重ねていくのか、どのように点を取られないようにするのが重要です。私たちSIGMAも「失敗してもOK!!みんなでカバーしよう」といった想いで活動して参りました。

今年度の活動を振り返ると、私は多くの失敗をしながらも、多くの方のご支援があって活動をやりきることができました。石井コーディネーターや支援教員の辻多聞先生、学生支援課尾川さん、イベントに参加して下さった皆さん、そして何よりSIGMAのみんな、本当にありがとうございました。



【副代表】江谷 稟空

この活動を通じて、私は、多くの人を楽しませることの良さを実感することができた。私は野球経験者ではないが、部活動の地域移行に伴い、「中学生がのびのびとプレーできる環境を整える」という目標のもと活動する中で、支える側としての大切さを学んだ。

最初は、野球に詳しくない自分になにができるか分からず、不安を感じることもあった。しかし、グラウンドの整備や運営のサポート、練習環境の改善といった形で関わるうちに、実際にプレーする人だけでなくそれを支える人の存在も重要であると気づいた。例えば、練習が円滑に進むように準備を手伝ったりすることで、子どもたちが集中してプレーできる環境が整い、それが彼らの楽しさにつながることを実感した。

また、選手たちが生き生きとプレーする姿を見るたびに、スポーツが持つ魅力を改めて感じることもできた。子どもたちが試合や練習の合間に交わされる笑顔を間近で見ることで、サポート側として私自身も大きなやりがいを感じるようになった。直接プレーしなくても、スポーツを通じて多くの人達が楽しく、充実した時間を過ごせるように支えることは大きな意味があるのだと

学ぶことができた。

この経験を通じて、「自分にできる形で誰かを支え、楽しませること」の大切さを知り、今後もこのような活動に関わっていきたいと強く思うようになった。これからも、多くの人々が楽しくスポーツに取り組める環境を作るために、できることを模索し続けていきたい。



【会計】小林 千加史

SIGMAの一員として、経験したことのない野球というスポーツに関わった。最初は不安もあったが、子どもたちの熱意や成長する姿に触れる中で、スポーツが持つ力の大きさを実感した。私たち自身も多くの学びを得ることができ、これからもスポーツを通じた地域貢献に取り組んでいきたい。

この活動を通じて、単に技術指導をするだけでなく、子どもたちの成長や笑顔、仲間との絆に触れることができたのは何にも代えがたい経験であった。これからも部活動の地域移行や地域のスポーツ活動に積極的にに関わり、子どもたちが夢や目標を持ち、それに向かって努力できる場を提供し続けていきたい。



【広報】佐々木 未来

今回、おもしろプロジェクトにおいて、「SIGMA」での部活動の地域移行に関する活動に携わりました。

今回の活動を通して、教員の部活動での土日出勤が問題視され、部活動の地域移行が推奨されている中での問題点や地域住民との関わり方について考えることが出来ました。

まず、部活動の地域移行においての地域との関係の重要性を感じました。数年前からのコロナ禍の影響もあり、コロナ禍以前と比較して、地域住民と学生、児童の関わりが減少していると感じました。その中で部活の地域移行を進めるにあたって、地域住民と関係を深めることの重要性を再確認することが出来ました。地域住民と協力して児童に対し、指導やスポーツをする場を提供することで、児童の体づくりやスポーツに対する姿勢、思いに繋がるのだと実感しました。

また、学生の立場からこの活動に参加することで、地域社会への学びを得ることができ、自分自身の成長に繋がったと感じました。スポーツ少年やその関係者の方々と直接関わる中で、テレビやニュースで得ていた新しい指導体制

の情報と、実際の現場の声や不安な思いを理解することで、社会的な視野が広がったと感じました。

この活動を通して、「地域社会」について改めて考えることができました。地域社会とは、地域住民とコミュニケーションを大切にし、その上で協力、助け合いから成り立っているものだと実感しました。

また、地域社会に貢献するには何をすればいいのか自ら考え、行動することの重要性を改めて感じました。「おもしろプロジェクト」での活動は、学問と地域社会を繋げる貴重な経験でした。地域の人々との交流を通じて、スポーツの持つ力や地域活性化の重要性を実感し、今後の自分の社会的責任についても深く考える機会となりました。



【広報】中川 真優

今回、私は「野球好き、いや野球大好き～中学生のための交流会～」という中学生の部活動の地域移行に向けた活動に参加した。私が参加した理由として、将来中学校の教員になりたいという夢があったからである。今の日本の教員の課題である仕事量が多すぎることによる多忙について、少しでも教員の負担を減らすための取り組みとしてや、少子化への対応として、部活動の地域移行が全国的に取り上げられるようになったと思う。もし将来教員になった際に、部活動の地域移行が完全に行われたらどのようなことになるのか先取っておきたいと思い、このプロジェクトに参加した。

私は今回広報担当としてInstagramでの告知や活動報告を行った。部活動の地域移行がどのようなものか実感できていない中学生やこれから中学生になる小学生、そして保護者の方々にとって、Instagramという多くの方が目にすることができるSNSで情報を発言することによって、心替えができたことや、より多くの人に関心を持ってもらうことができたと思う。今後も、広報活動を通じて、部活動の地域移行に関して関心をもってもらえるよう活動していきたいと思った。

最後に、このような素晴らしい機会を与えていただき、心から感謝申し上げます。



【コーチ】林 彪斗

SIGMA の活動を通して、野球がもたらす影響が多くあることを実感した。特に、徳地野球スポーツ少年団との野球教室では、少ない人数ながらも、どのようにしたらチームとしてレベルが高くなるのかを考えていた。ここでのレベルは、野球の技術だけでなく、人間性も大きく関わっている。

来年度からも継続して、活動に取り組もうと思う。

関わってくださったすべての皆様に感謝申し上げます。



【コーチ】林 宗明

今回のおもしろプロジェクトを通して、多くのことを学べ、経験できた。

自分の今回参加したおもしろプロジェクトは、地元の子供達に野球を教えることを通して、地域交流を図るものだった。

今回は2つのチームで合同でやり、お互いのチームに野球を教えると同時にその2チーム同士の交流も深めた。自分は野球経験者ということもあり実際に子供達と練習、指導をした。

今回のおもしろプロジェクトに参加して良かったことは、最近の子どもと関われたことだ。自分は将来教師を目指しているが、大学生のうちに子どもと関わる経験などまずない。今のうちに子供達と関わることは将来大きなアドバンテージになる。実際に、小学生と会話をすると、自分の中の子どものイメージと大きな差がありギャップを感じた。

また、指導の難しさを感じた。自分の中での伝えたいことと、実際言葉にして相手に伝わることで差が生まれ、伝えたいことが伝わらなかったりするのを実際に感じた。これを経験できたのはすごくいいと思った。それに、大学に入ってから運動不足であったため、定期的に一日中動く日ができるの

はありがたかった。

自分は、今回のおもしろプロジェクトで学んだ様々なことを、実際に自分が就職したときに活かしていきたいと思った。